

令和2年度学校評価

はじめに

令和2年度は、新年度開始より新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大による、緊急事態宣言が出され、教育課程、学校運営において多大な影響を受けることになった。このような不測の事態において、通常の学校評価の視点と異なった点が求められるであろう。今回の総評はこういった不測の事態への対応と、最終的な教育課程の評価の2点で総評したい。

1. COVID-19感染拡大に対する取り組みについて

1) カリキュラムマネジメントの適切性

- ・4月7日の緊急事態宣言をうけ、外部講師ならびに国立病院機構本部の支援を受けて、5月7日から早期に「同時双方向ソフトウェア授業」が開始されたことは、評価できる。
- ・国の感染拡大に関する宣言や解除を基に、対面授業の開始時期、実習の開始時期や日程の変更等を的確に判断し、カリキュラムの運営への影響を最小に防ぐことができていた。

2) 感染対策の適切性

- ・対面授業に当たっては、体育館の利用などソーシャルディスタンスを配慮した対策が取られており、適切に対応していた。特に密になり易い演習科目に関しては、学生数を制限して行うなど工夫し、適切な対応がなされていた。
- ・実習に関しては、開始時期や日数、現場の看護師との協働で動画を作成、視聴するなど、学内での教育方法の工夫がみられ、昨年度より評価が高い教科科目もあった。

2. 教育課程に対する取り組みと評価

国立病院機構および母体病院の理念に基づき、目標を意識した取り組みがなされていた。また目標達成とCOVID-19感染への対策双方から、その課題の解決に向けて教職員が団結して取り組んだ。

- 1) 「国家試験 100%をめざす」に関しては、1名が不合格あったが、全国平均を上回る成果であった。
- 2) 各学年のカリキュラム評価は、2、3年生に関しては、昨年度と比べてほとんどの項目が向上した。コロナ禍の中で少ない学習機会を活かしたいという学生の内的動機付けと教育支援が有効に作用したと推測される。一方1年生は「わかりやすい授業が多い」「課外活動に満足している」の2項目が大きく低下した。4月より対面での授業が中止となり、ソーシャルディスタンスの確保、マスク着用など、新しい環境への適応できにくさと、リモートでの講義法の工夫、学生生活の充実への支援の必要性が課題と考えられた。

3. 今後の課題となる点について

- 1) 来年度も、コロナ禍での教育体制の整備が課題となる。特に実習に対しては、今年度同様、関連施設と効果的に調整を行い、目標が達成できるための工夫が必要である。
- 2) 新入生に対する、学習支援、リモート学習の工夫が必要である。非常勤講師が多い状況もあり、非常勤教員に対するFDへの取り組みが必要である。難しい点ではあるが、学生間のコミュニケーションを促進できるような工夫も考える必要がある。
- 3) 文部科学省メディア授業告示によると「双方向ソフトウェア授業」は、eラーニング授業に位置付けられている。学生同士のディスカッション時間を確保する、理解度を確認するための簡単なテストを実施するなどの工夫をする必要があるとされている。今後もリモートによる講義の実施が必至と考えられることから、教育方法に関する教授者の研修等の取り組みが必要であろう。
- 4) 予算上の措置として、リモート学習の支援策として、学生、教職員ための環境整備が必至である。また、新カリキュラムからICT「Information and Communication Technology」の科目が新設されることもあり、ICT環境の整備が喫緊の課題である。

令和3年4月27日

国際医療福祉大学 吉村恵美子

令和2年度 養成所評価

評価基準 4：適切 3：ほぼ適切 2：やや不適切 1：不適切

	自己評価	学校関係者評価
I. 教育理念・目標	2.8	3.5
	地域が当校に求めるものを明らかにし、地域に貢献できる学校経営の中長期ビジョンを明確にする	教育理念は明確であり、目標が適切に定められ、それに向けて努力していた。
II. 学校運営	4.0	4.0
	働き改革に取り組んでいるが、COVID-19感染拡大によるオンライン授業などの取り組みにより超過勤務が生じている。業務の効率化に取り組む。	年度始めより、COVID-19感染拡大による不測の事態が発生したが、早期から学生の安全と学習目標の達成状況をモニタリングしながら、適切に判断、対処した。
III. 教育活動	3.6	3.8
	COVID-19感染予防のため、専門分野の知識を高める機会が減少した。教員の臨床への異動を踏まえた研修参加計画を行う。	教育方法を工夫し、できうる限りの対策を講じていた。特に実習における教育活動に関しては臨地との協力関係が良好であり、協働しながらの教材開発ができていた。
IV. 学修成果	2.6	3.5
	国家試験不合格者1名であった。不合格者の学習の分析と対策を立てる。卒業生の動向調査を行っていないため、今後実施に向けた計画を立てる。	国家試験の結果は全国平均を上回った。また、特に高学年は最終学習満足度が例年より高く評価に値する。しかし1年生に対する学習支援に対する課題が残った。
V. 学生支援	3.8	3.5
	里帰り企画は1年目の離職率が高いと言われているWEBで3回実施した。今後は在学中から卒業後に相談ができる母校になれるような取組みを行う。	コロナ禍の中、方法を工夫しながらの取り組みは評価できる。
VI. 教育環境	3.3	3.0
	大型校となり10年が経過しているため、施設・設備に不具合が生じていく可能性あり。WEB授業の導入によりネット環境をさらに整える。	更なるネット環境の充実を望みたい。
VII. 学生の受け入れ募集	4.0	4.0
	教員の高校訪問等、募集活動を継続し、学校説明会見学者は増加しているため、学生確保に繋げる。	コロナ禍の中、工夫しながらの取り組みは評価できる。
VIII. 財務	3.5	3.5
	地域医療介護総合確保基金事業費補助金を満額獲得できている。不足分は母体病院の補助を受けている。必要な教材は計画通りに試行する。	適切に対応できている。
IX. 法令等の遵守	3.6	4.0
	学生相談室は対面のみであったため、学生の利用はほとんどなかった。対応をメール等でもできるよう変更する。教員の情報管理強化を徹底する。	適切に対応できている。
X. 社会貢献・地域貢献	3.6	3.0
	学生自治会を通してのボランティア活動はCOVID-19の感染予防のため実施できていないが、学生より献血協力の提案があり実施した。	コロナ禍の中、工夫しながらの取り組みは評価できる。